

書評と紹介

江島尚俊 三浦周 松野智章編

『戦時日本の大学と宗教』

法蔵館 ○七年 月刊

A5判 vi+四八四頁 五〇〇円+税

藤田大誠

本書は「大学と宗教」という共通研究テーマを掲げた上で近代日本の主として戦時下(満州事変から昭和十年(一九四五)の敗戦まで)における大学を舞台として設定し、宗教の研究¹⁾及び宗教者の教育²⁾に関する実態解明に取り組んだ論文集であり、大正大学総合佛教研究所「大学と宗教」研究会による「シ・ズ大学と宗教Ⅱ」として刊行された(一頁)。また、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C「戦時下宗教系大学における宗教研究と宗教者養成に関する実証的研究」(研究課題/領域課題番号 六二七〇〇六七 平成 十六

十八年度、研究代表 星野英紀)の研究成果でもある。

本書は 冊目の論文集であるため、シ・ズ大学と宗教Ⅰとして出版された江島尚俊「三浦周 松野智章編『近代日本の大学と宗教』(法蔵館、〇四年)と合わせ読むことによつて「大学と宗教」という枠組を前提としたこの共同研究の意

図を十分に理解することが可能となる。前作の「はじめに」によれば「本共同研究でいう『宗教の研究』とは「種々の宗教に関わる学術的な研究全般のこと」を指し、それが「大学という空間を中心に展開してきたこと」に着目している。また、「宗教者の教育」としては「宗教者の資格を欲する者に対して指定のカリキュラムを提供し宗教者へと養成していくという場合もあれば、すでに現場の実践者として活躍している宗教者に対して行う教育もある」など、要するに宗教者の養成や研修に関する様々なケースが想定され得るが、それらを主に担ってきたのが「宗教系大学」であると位置付けている。

なお、前作は「日本の近代化過程に焦点を当てて」「大学もしくは専門学校」という高等教育の制度と機関のなかで「宗教がどのように位置づけられ、教育研究され、宗教者が養成されたのか」を検討したものであった(一頁)。これに続く本書は「近世期から継承されてきたもの、明治期に新しく導入形成されたもの、その他あらゆるものを十把、絡げに再編していったのが戦時下であった」、さらには「大学と宗教は総力戦体制のなかに強制的に組み込まれて、または自主的に参加していった」という認識のもと、「当時の教育制度や大学論、各大学、専門学校を含む」における組織体制、宗教関連の学問、科目、さらには学内での実践活動等に焦点を当てながら戦時下における実態に「追」ろうという目的を持っている(二頁)。

しかし、本書の内容は「大学と宗教」という共通テーマを掲げながらも、各々の視点や方法に基づいて様々な対象が取り上げられ、前作と同様、今回も統一した見解を提示していない。

のであり、各章が国家行政との関わりをなかで論じられている点は共通している」と述べるのみで、「大学と宗教」という枠組を提唱しつつも、各章の内容を比較・検討するなどして共通する部分と相違する部分を見出し、それらを整理した上で明確な全体像を打ち出しているものではない（vi頁）。つまり、前作に対する安中尚史の書評（『宗教研究』第八九巻第一輯、二〇一五年に所収）による「何か一定の基準をもとにして大学・宗教・教派・学問領域などが選ばれたわけではなく、…中略…」見るとまとまりに欠く冊」として捉えられかねない恐れがあるという指摘は、本書においてもそのまま当て嵌まる。

勿論、共同研究遂行上、各研究者の多種多様な問題関心を共通テーマに即した方向に振り向ける難しさは評者も重々承知しており、また、そのようにしないことでより広がりのある成果が生み出されることもある。本書は、「大学と宗教」という大きな枠組のみ提示して、各研究者の問題関心にに基づき料理（考察）された各ディッシュ（各論）をテーブル上に並べることによって、後は読者によって如何様にでも献立コース（文脈）を構成して結構、とその全体像構築の営為については読み手側に委ねているように見える。評者としては、総論的論考による論点整理が少しでもあれば、本書総体に対する批評もし易かったのであるが、本書の性格がそれを許さない以上、各論考の内容に関する個別的な紹介と批評を軸とするほかない。その上で評者なりに本書の意義と多少の意見を提示してみたいと考える。

第一章「総力戦体制下における教育・学問・宗教」（江島尚俊）では、総力戦体制に関する先行研究における知見（動員）

意識して日本社会の総体を捉えようとする試みはそれなりに有効性があると考え、本人も指摘しているように、具体的な事実を丁寧に追っている訳ではなく、未だ研究史整理に基づき総力戦体制研究を下敷きにした演繹的な検討に留まっている。

また、江島は、欧州近代国家の「神」と対置されるものとして日本では「神格化された天皇」がそれに当たるとする三谷太郎の説を援用し、「天皇」に記紀以来の「神格化され信仰の対象となる役割」と「近代国家日本を正当化する根源としての役割」を見出して「日本の近代化（＝ヨーロッパ化）」と天皇制との確立とは「車の両輪関係」と述べている（二七―三〇頁）。つまり、「天皇」と欧州の近代化としての社会の機能主義化は表裏、体ものとして捉えられている故、「近代化が進展すればするほど、統 国家理念を保持するために根源存在としての「天皇」が日本では強調されることとなる」（三〇頁）という。

しかし、天皇の淵源を神代（或いは皇祖神）に求めることと天皇の「神格化」とは、時として重なり合うこともあるが、本来は別次元の話であり、区別すべきである。天皇と国家、国民、社会との相互関係や天皇観に関する紆余曲折を経た長い歴史を鑑みれば、本論文で、種の理念型として表現されている「天皇」は、聊かダイナミズムを欠くステイタックな捉え方に見える。

さらに、近代化の帰結としての総力戦体制という、直線的にも見える史観で論じ切ってしまうと、本論文が主張する、総力戦体制に伴う「天皇」を至上理念とした急激な、読み替えの周期性も埋没してしまう。「自身の正当性の根源を「天皇」に求め続けた結果、「天皇」は無限に拡大解釈されていくこと

と「資源化」を方法的根拠として踏まえ、教育・学問・宗教の三者が近代日本国家の形成過程である明治期には制度的に分離を遂げて各々独自の領域を形成していったことを前提として、戦時下の総力戦体制（機能性追求の動員システム）においては教育・学問・宗教が急激に「資源化」され、「天皇」を至上とする様々な理念（国体、日本主義、皇国など）として、読み替えられた上で融合していったという見取り図を描いている。

江島は、頼頼厚や山之内清らの総力戦体制研究、島山弘文や桑野弘隆らの「動員史観」に関する研究を整理した上で、総力戦体制における、最大の敵、をその構成要素「人的資源」間に生じる対立、葛藤と捉え、その撲滅及び再浮上抑制のために人間の内面を変革させていくという「資源化」の実践としての「精神動員」が生ぜざるを得ないと論じ、先行研究を駆使して日本における総力戦体制の構築過程を跡付けている。また、かかる昭和前期の現象は決して異常事態ではなく、機能主義的社会を追求した近代社会の必然的な帰結として総力戦体制構築を目指す社会も出現したのであり、教育・学問・宗教の「天皇」を基準とする、読み替えは、あくまでも「総力戦体制構築」動員システム潤滑運用「社会の機能主義化」という日本近代化の道程を外れない、読み替えであった」（三九頁）とする。

この理論面に重点を置いた江島論文は、典型的な「日本ファシズム」研究の如き戦時期の批判を目的とした規範的な研究（村上重良の「国家神道」論などもその一種）から脱した冷静な考察であり、宗教史・教育史に総力戦体制研究の視点を導入したものと見て貴重である。ただ、評者も戦前、戦後の連続性を

となってしまう」（四頁）こと理由は、国体観の転回など別の点にも求められるべきではなからうか。

第二章「大学における日本主義—日本近代化における歴史哲学試論—」（松野智章）は、近代日本の大学における「宗教的世界観ともいえる天皇論」や日本主義とは何かという問いに対して、ウォーラ、ステインの「世界システム」論などを踏まえ、「世界史」的近代の受容という観点から「歴史哲学」的解答を試みたもので、「天皇」という存在を通して「歴史」と「世界」を理解したのが戦時の概念枠であるが、「天皇の抽象と具体の一重性が西欧の（神）と近代化の構造と類似性をもって捉えられる可能性を示し、大学の概念枠として日本主義が機能したことは、天皇という存在が日本の近代化に貢献し、近代と融和性の高かったものであることを示すもの」と論じている。

昭和前期の学界状況を異常や逸脱、戦時特有の国内事象と見るのではなく、「近代化のなかで普遍性をもつ事象」（五一頁）と位置付ける松野論文の視点はユニークであり、江島論文とも通底する面がある。但し、この論文の目的は、日本主義の内容紹介ではなく、日本主義が席卷したという事実の評価」（五三頁）にあるため、具体的事例としては東京、京都両帝国大学などにおける「日本主義」に関する講座や文部省編纂「国体の本義」松永材の「日本主義の哲学」、上杉慎吉、一六事件の首謀者の人である磯部浅一、教学刷新評議会などに触れているものの、いずれも断片的引用に留まっている。かかる抽象的アプローチには未だに慣れない評者は、聊か論旨が散漫な印象を受けた。例えば、昭和前期に独自の「日本主義」を唱えた國

に始められ、現行制度にも継承されていることが興味深い。ただ、立正大学の配属将校や体操教師の軍人にその訓育が軍隊教育と致し「日本精神」に適うものと評されたことは紹介されているが、関係史料の未発掘という面が大きいのか、当時の具体的な修練、教育内容は窺い知れないことが残念である。

第五章 戦前期の神道系大学における神職養成—藤本頼生—
 戦前に國學院大学の経営母体である皇典講究所（及び同分所）が内務省より委託されていた「学階」（国学に関する学力検定で神職任用基準となった）の試験及びその授与、國學院大學の教育課程と神職養成との関係、さらにこれまではあまり言及されることの無かった神宮皇學館大學の戦時下における教育内容と学生の回顧談などを紹介している。先行研究の参照も怠らず、現在の神社本庁の階位制度を視野に入れながら宗教教団とは決定的に異なる在り方を示していた戦前における神社神職の資格付与、神職養成の複雑な展開や意義がコンパクトに整理されている。評者も少々手掛けている主題であるため言及したいことは多いが、ここでは、点のみ指摘しておく。恐らく編者の要望に忠実に応えたからであるが、戦前期の國學院大學、神宮皇學館大學を「神道系大学」とのみカテゴライズして論ずることは、他の教団立の高等教育機関や宗教者養成との決定的な相違を掴み辛くする。戦前の神社神職の性格を単なる「宗教者」と捉えると実態を見誤る。両大学を「国学」（皇学）の高等教育機関として捉えた上で神職資格付与や神職養成、神道関係科目との関係を論ずるのが適切な方法と評者は考えている（但し、周到にも藤本論文はこの点にも触れている）。

第六章 立教大学と聖公会神学院の「重学籍制度」—大江満—
 は、大学令による立教大学文学部宗教学科と専門学校令による聖公会神学院の二重学籍制度、二年間共通科目を修め、両校の卒業資格を得るに着眼し、その成立から終焉までを詳述した論考である。「財団法人聖公会教育財団」傘下両校の緊密な連携制度は、大学と宗教者養成機関との分離という文部省の方針がある中での異例で、大正十年、九、二から開始され、昭和六年、九、一に経営母体が「財団法人立教学院」と「財団法人聖公会神学院」に分離した後も同十五年まで維持された。同十七年には立教大学文学部宗教学科から聖公会神学院関係者が「掃され、神学研究機関と聖職者養成施設の機能分離」、また学則の「基督教主義—ヨル教育」を削除して「皇道ノ道—ヨル教育」を挿入する決議をなし、さらに教会合同問題を巡る日本聖公会分裂という関係教会解体に連動して同十九年には文学部が閉鎖され、聖公会神学院も閉校を余儀なくされた。大江論文は、立教学院幹部、日本聖公会合同派と聖公会神学院幹部、日本聖公会非合同派の対立構図を見出し、戦時下の宗教団体法施行後における聖公会同系組織、大学、教会、神学校」の解体過程を具に描き出している。なお、本論文では、立教学院内の「皇道主義」の存在が指摘されている。大江も参加した老川慶喜、前田、男編著『ミッシヨンスケルと戦争—立教学院のディレクマ—』東信堂、〇〇八年、でも多少言及されているが、その具体的な内容の詳しい検討も必要であろう。

第七章 敗戦前キリスト教系大学における教育組織、カリキュラムの変容について—高等学校高等科教員無試験検定指定を

學院大學教授の松永材、人としても、その思想的転回、言説変遷の理解なしに単純かつ、面的に捉えられる人物ではなく、未開拓としか言いようのない研究対象なのであるから、実証的歴史研究のアプローチが殆どを占めている本書の収録論考としては、何か一つの軸となる具体的な対象を設定した上で「歴史哲学」的に検討しても良かったのではなからうか。

第三章 戦時下の上智大学—カトリック系大学はいかに「日本精神」と取り組んだか—ケイト、ワイルドマン、ナカイ（翻訳）田中アユ子
 は、イエズス会が創設した戦前日本唯一のカトリック系男子高等教育機関である上智大学を対象としてその創設過程や展開を略述した上で、教育、研究における日本文化や「日本精神」への取り組みの変遷を検討している。

ナカイ論文は、プロテスタント系諸学校と比べると研究蓄積の薄いカトリック系大学を取り上げた貴重な論考であり、近代日本教育制度の中で早くから、一定の地位を得ていたプロテスタント系が宗教（布教）活動を教育課程と結びつける方向性に拘って政府による宗教と教育の分離の影響を大きく受けたのに対し、後発のイエズス会が設けた上智では、西洋思想、文化の「正しい」理解を広めることに重点を置き、正規の教育課程に表立ってカトリックの性格を組み込まず聖職者養成の神学教育も施さなかったため、政府の立場とは軋轢が生じなかったという。それでもカトリックは当時の日本社会で、一般的であった「帝国への忠誠心」を示す儀式（神社関連行事も含む）の導入には積極的でなかったが、昭和七年、九、三における上智大学学生生の「靖國神社非参拝事件」以後、神社参拝や国家儀礼は

世俗的性格を持つ崇敬であると位置付け、カトリックと両立し得る正当な権威に対して扱うべき敬意の「環」として受け入れて学校行事への積極的な導入を図り、「モ—ユメンタ—ニボ—カ」（欧州言語による日本研究に関する国際的学術誌）創刊や「キ—ンタン文化研究所」設立により、ドイツ人による神道、国学研究を含む日本関連の学術研究が積極的に発信されたという興味深い事実を紹介している。但し、恐らく日本語能力を欠くイエズス会士たちが主導的役割を果たせなかったことから、教育課程への日本関連科目の導入は消極的であったことも指摘する。

いずれの立場に対しても、方的な指弾の無い史料に即した筆致には好感を覚えた。なお、本論文に登場する「モ—ユメンタ—ニボ—カ」編集長ヨハネス、クラウス、上智大学教授）は昭和十年、信者間の希望に応じて皇道に関する発表論文を纏め、岡山のカトリック思想、科学研究所から「教育原理としての皇道」を刊行したが、日本人と見紛うほどの国体論を書いた彼の如きイエズス会士思想形成についても今後の課題となろう。

第四章「近代における日蓮宗の僧侶養成と大学教育」（安中尚史）は、近現代の日蓮宗における僧侶養成の資格、教育制度と宗門立高等教育機関、日蓮宗大学林—日蓮宗大学—立正大学との関係について変遷を跡付けている。特に昭和十年、僧階を新叙すべき者は、知識偏重を反省し新たに設けられた修練の場である「信行道場」修了者に限ることとなったが、これは知力養成を第一義とするものではなく、立正大学で学ぶ者の占める割合も低かったことが指摘されている。宗門内学校における修学歴や各種検定合格を入学資格とする「信行道場」が戦時下

めぐって」（奈須恵子）は、戦前のキリスト教系の大学令大
学（同志社大学・立教大学・上智大学・関西学院大学）を対象
として、高等学校高等科教員無試験検定指定に着目しつつ教育
組織とカリキュラムの変容を検討し、史料制約から昭和十四
年までの分析ではあるが、天皇機関説に対する如きあからさま
な弾圧と位相を異にする。「文部省によるソフトかつ着実な統
制」（二八六頁）を見出ししている。文部省のチェックは、講義
内容が、東京帝国大学と同等であるべきとされたことや「西
洋 偏重への警戒」と「東洋及日本」重視の方向性であったた
め、必ずしもキリスト教系特有のものではないが、仏教系大学
の仏教学科等とは異なり、牧師 聖職者養成と関係性が高いと
目された学科等では「修身」の指定が受けられなかったことが
決定的な違いであると指摘する。奈須論文は、船寄俊雄 無試
験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割
に関する歴史的研究』（学文社、二〇〇五年）などで蓄積され
てきた無試験検定研究に高等学校教員の無試験検定指定という
新たな光を当てたもので、教育史的観点からも貴重な論考であ
り、今後、他大学も含めた全体像解明が期待されよう。

第八章「社会」と対峙する仏教学―戦時下における大正大
学を中心に―（三浦周）は、近代の所産である（大学）におけ
る（仏教学）や仏教そのものが戦時下において如何に社会と対
峙したかについて、大正大学を中心に論じたものである。三浦
論文は、まず各大学における仏教系学生団体の存在や民間学術
財団の啓明会による仏教関連研究に対する助成 講演を例に挙
げて（大学）と 仏教学が仏教の社会化を担保、推進したと

述べ、次いで仏教系大学である大正大学の独自性を演出する自
己規定は、その施設や行事（宗教儀礼）などの在り方から（寺
院）化にあると指摘する。さらに同大学における戦時対応とし
ての「皇道仏教研究所」や東亜学科（専門学校レベルではなく
大学令大学の学科）の新設を取り上げ、その設立経緯、研究
教育の実態を確認しているが、そこには研究の低調と学習の欠
陥が生じていたという。三浦は、これらを「社会的責任の所在
を明確にしないまま進められる仏教の社会対応である。これは
現在でも変わらない。「皇道翼賛の仏教」と「社会貢献する仏
教」には何ら違いがない。（三四八頁）と皮肉に結論付けるが、
理ある見解であろう。ただ、前作所収の 浦論文に対する林
淳の書評『近代仏教』第二号、一〇 六年に所収）が指摘
していたことと同じだが、複数宗派連合としての大正大学の独
自性について、他の宗門系大学との比較があると有難かった。

第九章「戦前戦中期における宗教系大学の慰霊 追悼―大正
大学を事例として―」（寺山賢照）は、従前取り上げられるこ
との少なかつた近代の宗教系大学における慰霊・追悼行事を概
観した上で、特に大正大学に焦点を当ててその具体的な事例を
詳しく検討している。寺山論文では、大正大学は、すでに大正
十五年の開学当初から学生への訓育の一環として学内で積極的
に大学関係者の慰霊 追悼法要を行っていたが、昭和十二年以
降の国民精神総動員運動や同十五年の報国団結などを背景と
して、大学の筑後活動の性格を持つ大学関係戦死者への仏式慰
霊 追悼や学生組織による学外の慰霊・追悼などが加わり、
徐々に仏式慰霊 追悼の主催を通して仏教系大学の独自性を発

揮しつつ 般国民、社会に対する指導的役割を果たそうとした
ことが指摘されている。寺山は、従来研究では仏教は「国家神
道」や 靖国の論理」に従属していたとする理解が根強いが、
大正大学における慰霊・追悼の実態は、その再考を促す契機に
なると述べている。今後は、宗教系以外の大学における慰霊・
追悼を含む総合的検討を視野に入れても良いのではなからう
か。

第十章「戦時下の日本基督教団と神学校の統合」（齋藤崇徳）
は、昭和十六年に三十四のプロテスタント教会が再編合同し、
「日本基督教団」が日本唯一の公的なプロテスタント教会とし
て成立したことに伴い、諸神学校 宗教教師養成機関）が統合
されて専門学校としての神学校 日本東部神学校・日本西部神
学校 日本女子神学校、昭和十九年には前二者が再統合、戦後
には後身として男女共学の東京神学大学が開校）が創設された
意義は、その「統合の思想」を通じて「日本基督教」の樹立を
目指し、教育内容が「日本化」した 日本のために貢献するほ
は唯 の神学校という、総力戦体制に即した国家的事業への独
自の直接的な回路、構造の成立にあったことを論じている。

この経緯について齋藤論文は、良く言われるキリスト教会の
「受難」とも考えられるが、「日本的な宗教教師養成、専門的神
学教育の 一つの頂点を示していた（四一 頁）とも指摘する。
果たしてかかる総力戦体制の産物の現在に至るまでの構造存続
は一種のラチエット効果が働いているに過ぎないのか、それと
も歴史的必然性が認められるのか」という問いへの回答は、
戦争への「協力」か「抵抗」という一者択一的思考に陥って

いない本論考の如き視座を踏まえてなされるべきであろう。
以上、駆け足で紹介してきた全十章は、新史料を駆使して新
たな史実を提示し、斬新な視座を提起している論考もあり、い
ずれも示唆に富む。特に「戦時日本の大学と宗教」という、と
もすれば断罪調の規範的な論旨になり易い主題にも拘らず、全
体として慎重な執筆姿勢による相当抑制の効いた記述となっ
ていることは、本書の価値を高めている。

但し、各論考の多岐に互る内容を整理して結び付け、さらな
る議論へと導くべき「総論」の不在は聊か惜しまれる。よくよ
く目を凝らせば、第 章の江島論文で示された近代化の帰結と
しての「総力戦体制」理解や、それに附随する戦前・戦後を貫
く歴史的な問題意識が共有されていると思しき論考もあるが
論点整理がなされていないため、明確な全体像を描き難い。
宗教の研究」と、宗教者の教育」の観点から、前作と本書の
各論文で検討された個別事例を比較して共通点と相違点を見出
し、各々の位置付けを試みて見取り図を描くだけでも、新たな
議論の呼び水となる。近現代を通観することが目的ならば
近代における旧制の専門学校や高等学校などの学校種を踏まえ
た表現の「高等教育と宗教」として捉え直す方が推移を理解し
易いかも知れない。初等・中等学校や各種学校との関係、「皇
道仏教」「日本基督教」をはじめ各種「国体論」の展開を補助
線とすると、思いも掛けない全体像へと繋がる可能性もある。

なお、編者らは「大学と宗教」というテーマの現代的意義を
問うために『シリーズ大学と宗教Ⅲ（現代日本編）』を企画中
とのこと（四七八頁）。ホップ ステップ ジャンプの要領で

大学と宗教」一部作を構想しているのかも知れないが、そろそろ次は共同研究者間の最大公約数的理解や意見の相違を含めて整理した総論的見解を打ち出しても良いのではなからうか。

寺田喜朗 塚田穂高 一又俊則 小島伸之編著

『近現代日本の宗教変動』

——実証的宗教社会学の視座から——

A5判 vi+四〇九頁 八〇〇円＋税
ハーベスト社 一〇 六年六月刊

芳賀 学

本書は 表題の通り、近現代日本における宗教を対象とする九本の論文と一本の研究動向からなる四〇〇頁を超える大部の論文集である。著者は、編者ともなっている寺田喜朗、塚田穂高川又俊則、小島伸之の四氏に加え、論文の著者として藤井麻央、間芝志保両氏、研究動向の著者として大場あや、小林惇道、原田雄斗の三氏を加えた構成となっており、全員が西山茂氏のゼミ参加者とその参加者のゼミに参加している者であるという。

序章および あとがき の記述によると、本書は、全体とし

て大きく、つの特徴を持っている。つ目は、モデルとして『リーディングス日本の社会学19 宗教』（宮家準 孝本頁 西山茂編、東京大学出版会、九八六年）を意識し、五部構成であった同書にならって、三部構成を採用し「ポスト リーディングスの研究テキストとなることを目指した」（四〇〇頁）ことである。そして、つ目の特徴が、西山門下のキーワードのつであり、本書の副題にも組み込まれている「実証的宗教社会学」という立場である。この用語については、序章の中で入念に検討され、「実証的な作業を伴わない研究風の言説——社会学的な発想から宗教現象へコメントを加えた評論や既成理論を機械的に当てはめたアドホックな事例報告——とは区別された、日本の歴史と文化を真正面に見据えつつ、社会学の視点方法を駆使しながら宗教と社会の関係を検討し、実証的知見と理論 モデルとの往還からポトムアップ式により普遍性のある理論構築を目指すスタンス」（五頁）と定義されている。著者たちは、西山氏とその師匠である森岡清美氏の学統を継ぐことを自認し、「近現代日本の宗教変動の特性に対する実証的格闘がどの程度の成果として達成されているか否か、読者諸賢の応答を待ちたい」（一八頁）と述べている。

この後、まずは、内容の概略を紹介し、私の立場から若干意見を述べたいと思う。最初に、本書の部単位、章単位の目次を示しておく。

序章 日本における宗教構造の変容と宗教社会学

寺田喜朗 小島伸之